2022年度　自己点検・評価報告書

（最終報告）

文学部評価分科会

2023年3月

基準４　教育課程・学習成果

2023 年度カリキュラム改訂を予定している学部･研究科については､下記の内容について記入ください。

- **授与する学位ごとに、学位授与方針を適切に定めているか。**
- **授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を適切に定めているか。**
- **教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。**

2023 年度にカリキュラム改訂を行わない場合は、下記の内容について記入ください。

- **教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2021 年度の自己点検・評価で課題となった事項
・教育課程とその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価するためのカリキュラム検討委員会の常設化 ・文学部全体で、演習や卒論の評価をどう考えるのか、講義科目と同様に厳密な評価を行うのかを、話し合って認識を統一させるべきである。

【２】2022 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
＜方針･改善計画＞ **･授与する学位ごとに、学位授与方針を適切に定めているか。** 　本年度、大学全体のディプロマ･ポリシーが改訂されたことを機に、また 2023 年から文学部の新カリキュラムがスタートするのに合わせて、これまでの文学部のディプロマ･ポリシーが適切であるかを点検した。その結果、改訂された全学のディプロマ･ポリシーとの整合性の上から、また学部新カリキュラムの理念･目的との整合性の上からも、現行のディプロマ･ポリシーは適切であると判断し、基本的に改めないこととした。なお、ディプロマ･ポリシーの前提となる文学部の「理念･目的」(『履修要項』他に明記)**(根拠資料1)**の「文学部人間学科は、本学の建学の精神と文学部の三指針『生命の尊厳の探究者たれ』『人類を結ぶ世界市民たれ』『人間主義の勝利の指導者たれ』を学部教育の理念として･･･」の文言中の「学部教育の理念」は、教育に限らず研究やその他の業務においても同じく理念たるべきであることから、この箇所を「教育」を削除して「学部の理念」に改めた。 　また、卒業要件についても以下のように一部改めた。 ＜卒業要件＞ 現　行:イントロダクトリー:選択必修科目 2 単位以上　　選択科目 4 単位以上 　　ベーシック:選択必修科目 2 単位以上　　選択科目 24 単位以上 　　アドバンスト:必修科目 14 単位　　選択科目 14 単位以上 　　合計:60 単位以上 　　自由選択:38 単位以上

変更後:イントロダクトリー:選択必修科目 2 単位以上　選択科目 4 単位以上

ベーシック:選択必修科目 2 単位以上　選択科目 26 単位以上

アドバンスト:必修科目 12 単位　選択科目 16 単位以上

合計:62 単位以上

自由選択:36 単位以上

なお、ディプロマ・ポリシーに記載の学修成果 7 項目の順番を、全学に合わせて変更した。

・授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を適切に定めているか。

2023 年度からの文学部新カリキュラムの策定に合わせて、現行のカリキュラム・ポリシーを大きく改めた。基本的な方針は、学生の「学びの選択性」と「学びの多様性」を実現するため、現行の 8 メジャー1 専修から 11 メジャー1 専修体制へと変更し、ダブルメジャー制の導入、卒業成果の多様化(卒業論文を卒業研究に変更)を行った。改訂の柱は次のとおりである。①建学の精神と学生のニーズに基づく「文化」重視の方針:「異文化コミュニケーション」4 メジャーの再編(言語＋文化のメジャーへ)、文化人類学・言語学の強化。②大学のグランドデザイン達成への取り組み:SDGs を積極的に学修する多文化共生・平和創造メジャーの設置、日本語教育課程の整備。③学生の自律的学習および「ライフデザイン力」向上のためのサポート体制の強化:「初年次セミナー」「人間学」等の必修科目の見直し(特にアカデミック=アドバイジングとの接続を強化する)、学生の自主性・自律性と協調性、およびコミュニケーション能力を養うためのプログラムの設置(「ピアサポート実践Ⅰ・Ⅱ」の新設)。④高い英語力をもつ留学生・日本人学生をターゲットとした AKADEMIA(EMP)のメジャー化。なお、カリキュラム・ポリシーの全文は根拠資料のとおりである。**(根拠資料1)**

また、「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」(答申)(文科省中央教育審議会 平成 30 年 11 月)における「高等教育が目指すべき姿」として示されているような、高等教育の「個々人の可能性を最大限に伸長する教育」への転換、 多様で柔軟な教育プログラムの必要性、高大接続、文理横断、幅広さ・多様性・柔軟性(主専攻・副専攻制の活用等による学生の学修の幅を広げるカリキュラムなど)、大学間連携などの諸点を踏まえた編成として、23 年度新カリキュラムでは、他学部との連携科目を大幅に増やし、これまでの法学部、国際教養学部との間の4科目を、国際教養学部、経済学部、法学部、教育学部との間の合計 26 科目とし、とりわけ「幅広さ・多様性・柔軟性」の実現を目指した。**(根拠資料1)**今後は他の方法でもさらにこの方針を推進する予定である。

・教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

別紙の新カリキュラム表に記載のとおり編成した。**(根拠資料1)**これまでと同様、学部全体での初年次教育の科目(共通科目に配置の初年次セミナーを含む)を置くほか、各メジャーにおいても、これまでと同様に、入門科目のイントロダクトリー、基礎科目のベーシック、発展科目のアドヴァンストの 3 段階に分け科目を配置している。メジャー制は、上にも記したように、本来学生の「学びの選択性」と「学びの多様性」を実現するところにその主眼があるが、これまでの体制では、ともすると学科や専修のような専門分野のたこつぼ化ともいうべき状況が一部に見られ、メジャー制の特性を十分に生かし切れていなかった面がある。そのため、新カリキュラムでは、複数メジャーにわたる授業科目の増加、ダブルメジャー制の導入、卒業成果の多様化、さらに他学部との連係

科目も大幅に増やしている。詳細は根拠資料のとおりである。

・教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

毎セメスターごとに大学全体で行っている授業アンケートに加え、文学部として一昨年度、昨年度とカリキュラムの満足度について学生アンケート調査を行って、そこで挙げられた学生の関心や希望、具体的には英語学習におけるピアサポート体制の実現、人間学の内容と開講期の検討、文化領域への関心の高さなどの結果を踏まえ、上に記した 2023 年度の新カリキュラムの編成方針を策定し、実施した。さらに、教育課程の適切性を定期的に点検・評価するために、かねてから課題であったカリキュラム検討委員会の常設化を、2022 年度 4 月に「カリキュラム委員会」として行い、今後この委員会で、新カリキュラムの実効性を担保するため、科目担当者の人事枠を含めた体制の点検も行った。これまで計 7 回会議を開催した。

なお、中間報告の際掲げた＜最終報告までの達成目標＞である①2023 年度新カリキュラムのカリキュラム・ポリシーおよび科目表の確定②2020 年度に作成したルーブリックを活用したうえで、演習と卒業研究の成績評価のあり方について教員間で合意を得る、の 2 項目のうち、①は根拠資料に示したように、これを達成した。②については、2021 年度に演習と卒論評価のためのルーブリックの活用の実態とルーブリックの使い勝手について担当教員から意見を聴取したのに続き、本年度は 2023 年 2 月に、演習と卒論評価のためのルーブリックの活用と成績評価の厳格化をテーマに学部FDセミナーを懇談的に行い、3 名の担当者からの報告に続き、全体での意見交換を行って、一定の方針を確認した。すなわち、ルーブリックは演習用、卒業論文用共に評価基準として妥当であり、実際に成績評価の際に用いている教員が多くいる。しかし、一方で、演習については、必ずしもルーブリックどおりに評価するよりも、教育的観点から柔軟な成績評価も必要であり、その点はゼミ学生の人数や状況によっても異なることから、成績評価の厳格化一辺倒ではない評価の仕方も必要との意見も複数出された。また、卒業論文についても、新カリキュラムで「卒業研究」と変更した背景の一つにもなった、特に少人数のゼミで論文指導が難しい学生がいる場合には、ある程度相対的な成績評価の観点も探っていく必要があり、新カリキュラムでの「卒業研究」開始以降の成績評価の多様化・柔軟化の検討と合わせ、今後も継続的に検討していくことになった。

次に、昨年度と一昨年度に行った基幹的な科目をアセスメント科目として学修成果を点検する作業のうち、キャップ制が適用されない B 評価の割合の向上を目指すことを中心とした点検を、本年度は、これまでの成績評価基準の B が、2019 年度から新たな B＋、B、B−となり、これが全学年に適用されることになったため、この B 評価の割合の向上を把握する点検を一旦見合わせ、今後の点検のあり方を検討していくこととした。

代わりに、本年度は、4 月に大学全体の方針として、各学部の数科目に SA を配置する追加予算措置が講じられたことを受け、その適用科目から幾つか選んで点検した。大学としては、成績低位層が相対的に多い科目を各学部で選び、成績低位層の成績向上を目的とする趣旨の予算措置であったことから、文学部としては、成績低位者が多くなる秋学期の 1，2 年次配当の科目、具体的にはイントロダクトリーとベッシックのうち、履修者数が多く、成績低位層が相対的に多い基幹科目に配置することとした。また SA の選考と活用の仕方についても科目担当者間ですり合わせを行った。配置科目は以下のとおりである。

＜イントロダクトリー＞

① 言語文化への招待　② 哲学・思想への招待★　③ 表現文化論入門（オムニバス）

＜ベーシック＞

① 日本語教育概論Ⅱ★　② 英米文学概論Ⅱ　③英語学概論Ⅱ★　④社会学概論

⑤ 社会で通用する日本語★

これらのうち、実際に SA を配置した科目には★印をつけている。まず、実際に SA を配置した科目の中から担当教員による点検内容を示す。**(根拠資料2)**

●「哲学・思想への招待」

本授業は履修者数173名（原則オンラインで、対面希望者のみ教室で受講）だったが、履修取り消し期間が終わる段階で、出席回数（および事後学習アンケート提出回数）に照らしてこのままでは単位取得が難しい学生を34名（＝約20％を）抽出し、その全員に、担当教員から個別にメールを出した上で、2名のSAからも手分けして個別にメールを送ってもらった。その後、学生からSAに「返信」があったのは2件、しかし最終的に「学習相談」があったのは0件であった。この結果だけ見ると、SA配置の直接的な効果があったと考えるのは難しいと思われるが、成績評価を終えて分かったことは、メールを出した34名中、その約65％に当たる22名はその後の事後学習アンケートの提出回数が劇的に改善され、最終的に、約50％に当たる18名は無事に単位取得ができた。この点に照らすと、教員とSAで個別にメールを出して意識づけを促した効果は確実にあったと考えてよい。なお、上記34名中、約25％に当たる11名はその後も事後学習アンケートは一度も提出されず、不合格となった。その他、出席回数が足りていたため教員とSAから特にアプローチをしなかった学生が、最終的に事後学習アンケートが足りずに不合格になったというケースも全部で10名あった。

以上を総合すると、SAを配置した直接的効果があったかは確言できないが、教員とSAから個別にメールを出して出席状況・アンケート提出状況に関する注意喚起を促したことには効果があった。

●日本語教育概論Ⅱ

履修人数は 9 名。SA の業務としては、授業に参加して履修学生のディスカッションの様子を見ながら、そのサポートを行う（ディスカッションがうまくいっていない、話し合いが活発でない、雑談に話がそれている、わからないことがあってつまずく等の場合に、関与する）。出席が悪い、課題を出していない場合には、連絡をとり、出席・課題提出を促す。発表の準備でわからないことや戸惑うことがあれば、その学生と面談してサポートするなどである。次に効果であるが、個人差はあるが、昨年度は 1 年生は 2 名（C、C）だったが、今年度 1 年生は 2 名（C+、B+）だったので 1 年生のサポートはできたように思う。また、合理的配慮学生 1 名、出席や課題がやや危ない学生 1 名がいたが、SA が何回か声をかけてくれたことで両者の成績も C になったように思う。また、SA がいてくれるということが教員自身の安心感にもつながった。教員が SA に「授業を受けていてわかりにくいところ、サポートが必要だと思われるところ、問題点など」を毎回細かく確認して履修学生に対応できた点が効果につながった。なお、課題としては、少人数のため、学生へのアプローチはメールや SNS ではなく、直接授業に来たときその前後や授業内で声をかけるという形で進めたため、上記のサポートがうまくいかない場合もあったように見受けられた。声をかけてもやや迷惑そうな反応だった様子を見たこともある。また SA も声のかけ方や内容の伝え方が難しいと言っていた点である。

●英語学概論

SA の配置の仕方については、成績不良の学生のためなので、その学生が利用するようにと言っても、成績を上げようとする意志のない学生には効果がない。勉強のやる気のある学生には、なぜ低成績者だけの SA なのだという反発があった。ただ、勉強意識の高い学生が SA を試験前に利用して成績を向上させているという効

果があったと考えられる。本科目は週に2コマあるため、SA の配分時間がまったく足りなかった。 設置時間は30時間ということだったが、50 時間以上 SA は時間をかけていた。 SA の負担が大きかったと思われる。今後は、科目に配置するのではなく、低成績の学生に SA を配置する方が効果的であると思う。 成績優秀な4年生が、同じメジャーを目指す 1-2 年生を支えるという仕組みをつくることを提案する。

●社会で通用する日本語

今年度、本講義には TA が既に 1 名決まっており、さらに SA2 名を追加できた。

⑴ 成績に問題のある学生を特定して指導をすることは現実的に難しく、疑問がある場合は SA に随時質問をするよう、学生全体に伝えた。SA には授業時間中は机間巡視し、授業時の疑問に答えるよう、適宜、声がけをするように伝えた。まず、支援の必要な学生から質問が出てくるようになったが、次第にそうした質問は減り、授業全体が緊張感のあるものとなった。

⑵ TA は個々の学生に対応する必要がなくなり、教科書(『日本語検定試験標準問題集 2 級』)の、各章が終わるごとに要点をふまえた小テストを作成し、学生に Google アンケートで回答してもらうことが可能となった(回答送信後に学生は自分の誤答がわかる)。この解答に疑問がある場合は、SA に質問するよう、学生に伝えた。(小テストは、終了後にも全体に向けた説明を行った)

⑶ 最終試験は、授業時に行った小テストの一部を作り変えた質問が 60%、新たな質問が 40%という配分で行った。小テストを復習しておけば、C 以上が得られると想定し、学生にその旨を伝えた。

⑷ . 今年度の後期試験受験者は 202 名、昨年度は 346 名で、母数が大きく異なる。また、昨年度は持ち込みを可とする試験であったが、今年度は試験が対面になったことで、成績に不安がある学生は履修しなかった可能性がある。これらを考慮に入れる必要があるが、B＋以上、特に A 以上が大きく増えたこと、同時に C 以下には大きな変化が見られなかったことが注目される。

資料1. 2022 年度「社会で通用する日本語」成績分布

評価	A+	A	A-	B+	B	B-	C+	C	D+	D	E+	E	N	I
評価点数	(100-95)	(94-90)	(89-85)	(84-80)	(79-75)	(74-70)	(69-65)	(64-60)	(59-55)	(54-50)	(49-45)	(44-0)	評価不能/Impossible	保留/Incomplete
分布(%)	10.1	11.1	10.1	24.7	9.6	8.1	5.1	8.1	3	2	1	1	6.1	0
人数	20	22	20	49	19	16	10	16	6	4	2	2	12	0

資料 2. 2021 年度「社会で通用する日本語」成績分布

評価	A+	A	A-	B+	B	B-	C+	C	D+	D	E+	E	N	I
分布(%)	0	3.6	22.1	11.7	19.8	12.3	10.4	8.1	3.2	1.3	1	1.3	5.2	0
人数	0	11	68	36	61	38	32	25	10	4	3	4	16	0

なお、本試験の形式は記号と漢字表記で解答する客観試験である。全体にA+、Aが昨年より増加している。B＋の 10 数名は実際には A－の成績で、1 点足りない場合を B＋としている。昨年が持込可の試験であったこ

とを考えると、上位の学生の数が増えたと見ることができる。B 以上であれば、来年度に日本語検定 2 級試験の準備・受験が推奨できる。今回のSAの一人は1年次に本授業を履修し、2 年次に日本語検定 2 級を取得している。学生はこのことに関心を持ち、今後2級試験を受験する学生が増える可能性がある。そのほか、留学生でも B 以上が取れる学生がおり、日本語検定 2 級合格は彼らの努力目標ともなっている。C レベルの分布は、昨年度と今年度とで傾向に大きな相違は見られない。D 以下についても、昨年度に比して大きく減少したとは言い難い。ここに該当する学生は試験問題の意味が十分理解できない低学力の者か、授業にきちんと出席しておらず解答に手間取った学生、および N1 が取得できていない留学生の場合であると思われる。

また、本授業は、全ての文学部生に受講してもらい、日本語力の全体的な底上げを目標として提案したもので、教科書は日本語の知識と理解度を問うものであるが、同時に読解力も求める。書く力、発表する力以前に、読解力は授業の理解の基礎である。その意味で、本授業の成績を見ると文学部の学生には、日本語力、読解力に課題がある学生が一定数存在する。本授業を履修する学生には、ある程度日本語力の必要性が意識されていると思われるが、履修しない学生については予想ができない。なお、本授業は、他学部の履修者が年々増えている。これは日本語検定 2 級が漢字検定 2 級などと同様、履歴書に記載できることもあり、就活を視野に入れてのことだと思われる。その多くは、非常に熱心であり、成績も良い。文学部生の場合、こうした積極的な動機付けがどの程度見られるか不明である。

次に、実際には SA を配置しなかった科目担当者からの意見を示す。

●英米文学概論Ⅱ

受講生が多い場合は難しいと感じた。取り組みとして今学期は毎回アンケートを実施して授業内容の理解度をチェックするように心掛けた。理解できていない点は振り返りなどで再度、説明などを加えた。成績評価は 100 名中、E 評価は 2 名だった。B 評価は 52%、C 評価は 15%、D 評価は 6%でした。SA の使用はゼミなどでは効果的だと思う。

●表現文化論入門

オムニバス科目であるため、担当教員全員に趣旨を説明し、候補となる学生の推薦を依頼したが、推薦がなかった。各教員の担当回が1～2回であり、それぞれの授業の終わりに個別に課題を出して、採点してもらうため、どのようにSAを使用するかということについても、イメージがわきにくかったことや長期欠席以外で各回のレポートを提出しない学生が固定化していないこともあり、効果的なSAの使用法についてうまく思い描けなかった面がある。

以上の点検や意見を踏まえ、SA を配置する科目や配置方法などについて、今後さらに効果的なあり方を目指して検討していくが、成績低位層の成績向上を目的として追加的に配置した SA であったが、結果的には成績上位層の一層の向上の方にむしろ効果があったとみることができる。

次に大学全体で推進しているティーチング・ポートフォリオ（簡易版）の導入・活用であるが、文学部はこれまで 5 名の教員が作成している。本年度はこれに加え、9名の教員が作成の希望を出したが、年度内に作成できたのは 3 名であった。ティ―チング・ポートフォリオ（簡易版）の諸項目のうち、「4. 教育の成果」の項目をこの 3 件につき、簡単に示す。**（根拠資料3）**

●英語科教育法

授業アンケートのコメントからは繰り返し履修生自身の経験を振り返った様子や教師からの適切なフィードバックがあったことが伺える。「確実に授業前より模擬授業をする力がついた！先生はすべて丁寧に教えてくれる

し，フィードバックをしてくれるため，改善を何度もできる。自分で気づいて，自分で考えて改善していけるところが本質的な授業でとにかく楽しかった！」 さらに，大学の授業アンケートとは別に担当教員が独自に作成した「実践の振り返りに関するアンケート」からは，協働的学習が学びにつながったことが伺える。「他学生からのフィードバックが非常に役立った。自分が気づかなかった点に気づいてくれ、改善点を教えてくれたことが役立った。」「批判的ではなく，どうしたらよりよい授業になるのかという気持ちがわかり、ありがたかった。」

●Academic Writing AⅠ・Ⅱ、近代英語史と文化、他

教員と学生とのやり取り、学生のペア・グループワーク、教室全体での共有などの活動により、知識の習得や共有のみでなく、学生のリーダーシップや、相手を思いやる心、多様性を受け入れる力も育まれていくと考える。文学部は、合理的配慮の学生も多いが、配慮される学生とする学生の双方の協力場面も見て取ることができた。実践の成果は、検証はできていないが、これまで、学生とのやり取りや授業アンケートの中で、ライティングのピア・レビューが学びに役立つこと、英語史での学びにより、言語と人間社会や言語と他の学問分野を関連づけて考えることにより、様々な発見があり大変興味深いという主旨のコメントをもらっている。2022 年度秋学期授業アンケートの履修生の記述の例として、以下を引用する。「課題や授業の内容についてグループで話し合いをすることが多く、色んな人の意見を聞くことができたので良かったと思いました。」「皆の意見をきける時間もたくさんあり新たな知識をたくさん得られたことが良かったです。教授が受講生を褒めて下さったり、励ましてくださったこともモチベーションに繋がりました。」

●イギリス古典文学史、イギリス近代文学史

具体的に成果を診ることは難しいため、直近の授業アンケートの自由記述の部分から関連しそうなものを拾ってみる。まず春学期の「イギリス古典文学史」の自由記述を見てみると、(1)「よかった点、満足した点など、この授業に関することをお書き下さい」について、「作家や作品に関する発表や小テスト作成＆採点を生徒が行ったのが良かった。クラスメイトに教える形で発表したり、問題を考えることで、知識が深く身についたと思う。」このコメントを見ると、学生たちに小テスト作題やプレゼンテーションを任せたことについて、その効果を評価してくれたものと思う。また、(2)「あなたが教員の立場になった場合、この授業をよりよくするためにどうしますか。具体的に書いて下さい」については、「学生同士の話し合いの時間を増やす。」これは現状ディスカッションの時間が足りないという指摘である。このセメスターについては、プレゼンテーションやその後の補足説明に時間を取られ、ディスカッションを削ることが少なくなかったことを反省している。もっとも、最近は、時間を取っても隣近所と話をしようとしない学生も増えており、やり方には工夫が必要である。また、(3)「その他、この授業に関してご自由にお書き下さい」についてでは、「現在の英語と古英語の違いなど、音声や文字の両方から解説してくださり、非常に勉強になりました。イギリス古典文学にますます興味が出てきました。」イギリス文学への興味が増し、今後実際に多くの作品に触れていくきっかけになったようである。

続いて、秋学期の「イギリス近代文学史」のアンケート回答から、やはり自由記述で書いてもらったものから、関連するものを拾っていくことにしたい。まず、(1)「よかった点、満足した点など、この授業に関することをお書き下さい」について、「 学生が自分で人物を調べてまとめ、伝えるということで、予習をする力が身についたように実感した。また、授業前の小テストをすることでもその力が増した。」「 その回ごとに学ぶ人物についてのプレゼンや小テスト作成を学生が担当することによって、自分の担当回の人物をよく調べることで興味関心が深まると思えたし、記憶に残りやすかったので、学生が担当するという点がすごく良かった。」「 毎週のテストによって、自身の学びを振り返れたことが良かった。」「 小テスト対策でもあるが、予習が必ず必要なので、予習をしてい

ることで内容がより入ってきて学びやすかったです。またビデオなどもあり学びやすかったです。」1 つ目と 2 つ目のコメントでは、やはり小テスト作題やプレゼンテーションを学生たちに任せたことについて、その効果を評価してくれている。もっとも、今期は担当を希望してくれる人が限られており、特にプレゼン担当の希望者が少なかったので、私が代わりにプレゼンをする回が何回もあった。本来は、どの回も学生が担当してくれるとよかった。また、3 つ目と 4 つ目のコメントでも小テストの効用について評価してくれているようである。次に、(2)「あなたが教員の立場になった場合、この授業をよりよくするためにどうしますか。具体的に書いて下さい。」については、「 授業内の小テストを担当する生徒に比べて、プレゼンテーションを担当する生徒が少ないと感じました。自分の考察なのですが、作者の情報を集めるのが難しかったのではないかと思います。なので、なにか資料を紹介します。」このコメントでは、図らずも担当教員が(1)で憂いていたことを指摘している。新型コロナ・ウィルス蔓延によりオンライン授業というものを経験したせいで、人前でプレゼンすることを躊躇する学生が増えたのかと考えていたが、資料不足という点は思い当たらなかった。図書館にもインターネット上にも様々な情報はあり、例年、学生たちはそういうものを上手に活用していたが、そういうことが苦手な学生も増えてきているのかもしれない。学生任せにせず、こちらからも資料などを提供できるよう、次年度は工夫をしたい。最後に、(3)「その他、この授業に関してご自由にお書き下さい」についてでは、「色んな詩人や彼らの作品を知ることができて良かったです。ありがとうございました。」「 今まで触れなかった作品に多く触れることができた。」講読の授業などでも新しい作品に触れられることはあるが、1 作品かせいぜい 2 作品である。時代の流れに沿って多くの作家や（抜粋ではあれ）多くの作品に触れられるのは、やはり文学史の授業ならではだと思う。受講生が、これを機会に新たな作家や作品に興味を広げていければ、大変嬉しい。こうして自由記述を並べてみると、一見かなり成果が上がっているように見える。但し、アンケートの回答数は決して多くはないし、全体の声を反映しているかどうかは注意しておかなければならない。

以上の担当教員の感想からは、教育実践における具体的な工夫が、履修学生の学びの充実につながったことがうかがえる。特に共通している点は、様々なアクティブ・ラーニングの手法を取り入れていることであり、その点を学生が評価していることである。ティーチング・ポートフォリオを作成することで、教員はそうした点をさらに意識できるようになり、教育力の向上と、そして学生の学修意欲の向上につながっていると言える。

【３】2022 年度の取組みの点検・評価と 2023 年度以降の方針

【2022 年度の取組みの点検】

・学位授与方針については、検討の結果、基本的に現行のもので適切であることを確認した。

・授与する学位ごとの教育課程の編成・実施方針とそれに基づく教育課程の編成方針については、これを定め、それに基づく科目表も確定した。また具体的なカリキュラム・ポリシーの文言も確定させた。

・教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか、また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているかについては、カリキュラム委員会の常設化を行い、7 回にわたる会議が示す通り、教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行う体制を整えることができた。また、本年度は学部として、合計 5 回（3 月中にもう 1 回予定）学部ＦＤセミナーを実施し、合理的配慮、アカデミック・アドバイジング、ティ-チング・ポートフォリオ、初年次教育、演習と卒業論文の成績評価をテーマにしたことで、それぞれのテーマにおける改善のための資料を得ることができた。今後も諸テーマを設け、継続的に改善を図っていく計画である。

【今後の課題および 2023 年度以降の方針】

・教育課程とその内容・方法の定期的な点検・評価については、体制は整えることができたが、その実質をどう担保するのか、さらに個々の科目レベルでの点検・評価は担当教員個人に委ねられている部分が多いため、今後これらをどう組織的に点検していくのかが課題である。例えば、ティーチング・ポートフォリオ(簡易版)を作成した教員はまだ少なく、取り組みを加速させる必要があること、さらに作成されたポートフォリオが学部教員間で十分に共有されておらず、共有のシステムと意見交換の場をさらに設定してく必要がある。

2023 年度以降の取り組みについては、新カリキュラムがその狙いどおりに機能していくかを見守りつつ、①カリキュラム委員会の定期的な開催、②学部ＦＤセミナーの年数回の定期的開催、③ティーチング・ポートフォリオ(簡易版)の作成推進と学部教員間での共有、④学部のアセスメント・ポリシーの見直しとアセスメント科目の再考、⑤初年次教育の充実とそのための専任教員の配置などを重点項目として取り組む予定である。

根拠資料１：２０２３年度履修要項

根拠資料２：追加 SA 予算配置科目報告書

根拠資料３：ティーチング・ポートフォリオ（簡易版）(3 件分)

基準５　学生の受け入れ

- **学生の受入のための広報活動、および学生の受け入れの適切性について、点検・評価を行っているか。**
- **受入れ制度ごとに学生の学習状況を把握し、点検を行っているか。**

１．学生の受入のための広報活動、学生の受け入れの適切性について

【１】2022 年度の方針・改善計画・取り組み等（および中期的な改善計画）

＜方針・改善計画＞

・学生の受入のための広報活動、および学生の受け入れの適切性について、点検・評価を行っているか。

学生受け入れのための広報およびその適切性についての点検・評価は、大学全体としてアドミッションズ・センターを中心に行っているが、加えて文学部では、学部の広報委員会や学部事務室を中心に検討し、学部 HP でのニュース発信数では他学部を大きく上回る積極的な広報を行っているほか、『キャンパスガイド』の学部ページの作成、学部教員からの受験生への推薦図書や作品、メッセージの発信などを行っている。**(根拠資料 1)**その適切性についての点検・評価も学部の広報委員会が学部事務室と連携を取りながら行っている。

また、学生受け入れの広報の大きな機会であるオープンキャンパスは大学全体として年 6 回行っている。文学部としては、他学部との統一性を考慮しつつも、学部独自の体験授業や受験相談コーナーを実施している。とりわけ相談コーナーは、学部のコーディネーターや各メジャーの責任者を務める教員スタッフ・職員スタッフだけでなく、「エンカレッジ・リーダー」と呼ばれるボランタリーな数十人の学生スタッフが運営をリードし、毎回終了後に反省会を開いている。

次に、学生受け入れの適切性の点検・評価については、大学全体で入試委員会を中心に行っている。文学部としては、一部の受け入れ制度（PASCAL 入試、公募推薦入試）において、独自の出願資格や受験科目等の条件を付けており、それらの条件が適切であるかを、入試委員会やアドミッションズ・センターと連携しなが

ら、コーディネーター会議や学部教授会でも点検・評価している。

・受入れ制度ごとに学生の学修状況を把握し、点検を行っているか。

学生の学修状況については、GPA として数値化できる部分については、大学の教務部が資料を作成し、一覧にしている。これは入試種別にもなっており、文学部としてはこれらの資料を用いて、学修状況を把握している。**(根拠資料2)**しかし、大学全体の授業アンケートや学部独自のカリキュラム満足度調査も入試種別にはできにくいため、GPA に現れない質的な学修状況の把握は難しい面がある。一方大学の IR 室がまとめている学生生活アンケートは GPA に現れない学修状況の質的な面についても捉えており、学部としても学生の学修状況を把握する資料として活用している。ただ、これも入試種別にはできていないため、受け入れ制度ごとの学修状況の把握は今後の課題としたい

＜最終報告までの達成目標＞

・2024 年度 PASCAL 入試と公募推薦入試の出願資格・条件の点検

現状の出願資格・条件は妥当と判断しており、変更しなかった。なお、全学の方針として、本年度から導入したパスカル・チャレンジ・プログラムの修了者の出願資格は従来の 3.5 から 3 に変更され、文学部もそのようにした。

・受入れ(入試)制度ごとの学生の学修状況の特徴と傾向性の分析

教務部作成の入試種別の GPA 資料を基に点検している。入試種別ごとに GPA の高低は把握しているが、それぞれの種別ごとに具体的な生活状況、学修状況は把握できていない。今後の課題としたい。

・GPA に現れない入試種別ごとの学生の質的な学修状況の点検・評価の指標の開発

GPA 低位の学生はアカデミック・アドバイザーがセミスターごとに面談を行い、報告書を作成しているが、その際入試種別はあまり意識されていないのが現状である。本年度はこれについては開発できなかった。

【２】2022 年度の取組みの点検・評価と 2023 年度以降の方針

【2022 年度の取組みの点検】

・学生の受入のための広報活動および学生の受け入れの適切性の点検・評価

これについては、文学部としては広報委員会を中心に行い、広報については一定の成果を上げている。しかし、志願者の増加にはつながっておらず、抜本的な対策が必要である。

・受入れ制度ごとに学生の学修状況の把握・点検

これについては、上に記したように、GPA については把握できているが、受け入れ制度ごとの学修状況、生活状況については把握できていない。

【今後の課題および 2023 年度以降の方針】

・2024 年度 PASCAL 入試と公募推薦入試の出願資格・条件の点検

過去に数回点検・改正を行ったが、今後もアドミッションズ・センターおよび入試委員会と連携を取りながら点検していく。

・GPA に現れない試種別ごとの学生の質的な学修状況の点検・評価の指標の開発

入試種別をきちんと意識して面談を行い、報告書の項目にも入試種別を書き込めるように学部としてはしたい。全学にも提案したい。また、授業アンケート結果の分析の際、授業外学修時間の長さとGPAの相関だけでなく、GPAに現れない合理的配慮学生の数に関する資料や進路決定率との相関などもIR室に依頼したい。

根拠資料１　学部HP
根拠資料２　教務部GPA資料

学生の意見聴取

- **履修、授業、DPに関すること**
- **昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について**
- **学生生活アンケートから見える本学の傾向性について**

【１】2021年度の意見聴取をもとに実施した検討や取り組みの内容

上に記したように、文学部として一昨年度、昨年度とカリキュラムの満足度に関する学生アンケート調査を行った。これについては昨年度の報告書に詳細を記しているが、具体的には、英語学習におけるピアサポート体制、人間学の内容と開講期の見直し、文化領域への関心の高さなどの結果を慎重に検討の上、2023年度の新カリキュラムの編成方針の中に盛り込んだ。**(根拠資料1)** 本年度については、常設化したカリキュラム委員会が点検・評価の役割を大きく果たしたこともあり、文学部独自のアンケート調査は行わなかった。

また、学生自治会の執行部メンバーと学部長・副学部長による懇談会である学部協議会を2度行い、学部の自己点検への学生の参加を依頼するとともに、そこでの意見をもとに、文学部のDPの一層の周知（各セメスターでの１・２年次の学部ガイダンスでの周知など）、学部の履修相談会を学生自治会の応援を得て実施、加えて学生の交流会への教員の参加、学生自治会の機関誌『文学の池』への教員の協力（インタビューや寄稿）、オープンキャンパスでの学生エンカレジ・グループとの協力などを行った。

なお、学生生活アンケートから見えてくる本学の傾向性についての分析は、今後の課題としたい。

【２】2022年度の意見聴取を踏まえた2023年度以降の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

学部として各種学生ケート結果を分析・点検し、常設のカリキュラム委員会と連携して、カリキュラムおよび学部単位の授業改善に役立て、さらに個々の科目レベルについての組織的な改善につなげていきたい。また自治会との共催による対面での履修相談会も行う予定である。さらに、FDセミナーについても、テーマによっては学生の参加を呼びかけたい。加えて、授業アンケート結果に対するフィードバックの割合が文学部は相対的に低いため、これの改善を図るべく、これをテーマにしたFDセミナーも企画したい

なお、学部協議会については 2023 年度以降も継続し、その中で学部の自己点検評価に積極的に参画してもらうよう呼びかける方針である。

根拠資料１　2023 年度履修要項（文学部の項目）